

〈知識〉としての「占い／おまじない」と少女 ——雑誌『マイバースデイ』読者投稿欄の分析から

橋 迫 瑞 穂

1. はじめに

本研究は、1980年代に広く支持を受けた少女向け占い雑誌『マイバースデイ』を取り上げ、その読者投稿欄である「ハローバースデイ」に注目して、読者による「占い／おまじない」の創出と展開が、誌面においてどのような役割を担うものであったのかについて検討することを目的とする。そのさい、〈知識〉による「制度」の「正当化」の過程についてのバーガーとluckmanの議論を手がかりとする。

バーガーとluckmanは『現実の社会的構成——知識社会学論考』（Berger and Luckman 1966=1977）のなかで、人は「自己自身をつくり上げる」ために、社会的な創造を他者とともに行わなければならないという考えを提起している。そのために彼らが注目するのが、「制度」である。「制度」とは日常の基盤をなす社会秩序のことであり、初期の段階では習慣化された行為が行為者たちによって類型化されることから始まる。彼らによれば、客観的に妥当なものとすると同時に、主観的にもっともらしいものとする「正当化」の過程を経て、「制度」はより確かなものとなる（Berger and Luckman 1966=1977）。この「正当化」に必要なのが、〈知識〉である¹⁾。〈知識〉とは彼らによれば、客観化された意味に妥当性を示し、説明する役割を担う語彙によって理論化されたものものを指す。〈知識〉は「制度」を「正当化」することで、究極的には象徴的世界

を形成し、そのなかで個人が「自らを〈位置づける〉」ことを可能にする。こうして、象徴的世界によって「制度」と個人の人生が共に蓋われた状態を、彼らは「天蓋」と呼ぶ²⁾。

『マイバースデイ』における「占い／おまじない」もまた、バーガーとluckmanのいう〈知識〉としての役割を担うものであったというのが本研究の仮説である。

『マイバースデイ』とは80年代の「占いブーム」を象徴する、1979年に実業之日本社により創刊された、少女向けの占いの専門誌である。女子高生を中心に全盛期には約50万人の読者がいたとされており³⁾、西洋占星術を中心に多様な占いやおまじないだけでなく、妖精や魔女、魔法にまつわる話題などを紹介してきた。また、ファッションや美容、学校にまつわるライフスタイルなど「占い／おまじない」とはかかわりのない情報があるのも一つの特徴である⁴⁾。筆者はこれまで、国立国会図書館分館、国際子ども図書館に所蔵されている1979年の創刊号から2006年に休刊するまでの『マイバースデイ』を包括的に分析してきた。長年にわたって刊行された同誌のなかでも、特に80年代には、専門の占い師の影響が大きかったことが指摘できる。その占い師たちは「占い／おまじない」を、単に未来を予知したり願望を叶えたりするためのものとしてではなく、少女たちに現実たる学校での人間関係に向き合い、そこでの軋轢を乗り越える努力に、神秘的な価値づけを与えるものとして提示してきた。そして、占

い師は本来であれば区別される、未来を予知するための「占い」と、災厄を未然に防ぐための「おまじない」とに、神秘的な「魔女」のモチーフを組み入れることで両者に統一性を与えてきたのである（橋迫 2014a, 2014b）。

このことは、言うなれば「占い／おまじない」とは、学校で人間関係を形成し、そこに自らを位置づけるという類型化された行為、すなわち学校において潜在的な「制度」を「正当化」するための〈知識〉としての役割を担うものであったと考えられる。さらに言えば、それはたとえ局所的かつ限定的なものであったとしても、学校と少女たちとを蓋う小さな「天蓋」を形成する役割をも担っていたと言えるのではないだろうか。

だが、80年代の『マイバースデイ』を特徴づけるのは、こうした占い師による「占い／おまじない」だけではない。読者もまた読者欄を通して、「占い／おまじない」についての情報を自ら発信してきた。読者による投書の内容を検討すると、少女たちは占い師の影響をそのまま受容してきたのではなく、占い師から独立した形で「占い／おまじない」を展開してきたことがうかがわれる。このことは、少女たちによる〈知識〉としての「占い／おまじない」が、少女たち自身が占い師と異なる立場から見出した「制度」と結びつきそれを「正当化」するものであったとも言えるだろう。しかしながら、「占い／おまじない」の内容自体は、占い師が示すものと全く別物というわけではない。

では、少女たちによる〈知識〉としての「占い／おまじない」とはどのようなものであり、どのような「制度」を「正当化」するものであったのだろうか。そしてそれは、占い師による「占い／おまじない」とどのような関係に置かれていたのだろうか。

その検討に入る前に、これまで『マイバースデイ』がどのようにとらえられてきたのかについて確認しておきたい。島蘭進は70年代から日本社会に見られた宗教や呪術に関する情報の消費と、

それに対する関心の高まりを「呪術＝宗教的大衆文化」と呼ぶ。これらは主に、『マイバースデイ』をはじめとする雑誌やテレビ、まんがといったメディアを通して広まった動向である。そのため、島蘭は組織だった教団に見られる「上から」の思想を教える教師役が不在の「呪術＝宗教的大衆文化」は、流動的で一過性的な性格を持つものであったとしている（島蘭 2001：172-196）。

『マイバースデイ』に焦点を当てた議論としては、弓山達也や大塚英志の議論がある。「宗教ブーム」と情報化社会との関係に注目する弓山は、『マイバースデイ』が少女たちに広まった「おまじない」に関する「口コミ」情報を集め、それを標準化して還流するメディアであったことを指摘する（弓山 1996：24-45）。他方、『マイバースデイ』の「おまじない」の内容に注目し、同誌の投書をまとめた書籍を分析した大塚英志は、それらが少女たちにとって身近な雑貨を材料に作られた「かわいい」モノであったことを特徴として挙げている⁵⁾。そして、それらの「おまじない」が恋愛を祈願の対象としながらも、結婚や出産へと連続するものではないことを指摘した上で、それらが少女たちにとって「ケガレ」のない「現実から遊離」するためのモノであったと述べている（大塚 1995：187-212）⁶⁾。

「呪術＝宗教的大衆文化」に注目する前者の議論では、そうした文化に関わる人々について、流動的、受動的な性格が強調されている。それに対して『マイバースデイ』そのものを取り上げた後者の議論では、特に「おまじない」における読者の主体的な関わりに注目しており、さらにそれが、雑誌というメディア媒体に特有のものであったことも指摘されている。だが、後者の議論は「おまじない」をめぐる投書のみならず焦点が当てられており、「占い」についての投書や、「占い／おまじない」に関わらない他の一般的な内容の投書にはほとんど目が向けられていない。さらに、「占い／おまじない」についての投書ではその方法や目的だけでなく、少女たちの日常での出来事や心情が

つづられたり、読者同士の交流がなされたりしたことに特徴があるが、そうした点にも触れられていないのである。

こうしたことから、投書における「占い／おまじない」の特徴をより深く検討するためには、「ハローバースデイ」について改めて包括的に整理したうえで、その内容をさらに踏み込んで検討する必要があると思われる⁷⁾。ただし、占い師による記事と異なり、読者欄はいずれも短い投書の集積で構成されているため、その全体像がつかみにくい。そのために、今回は「ハローバースデイ」の概要を整理した上で、「占い／おまじない」についての投書を抽出し、計量テキスト分析の手法によって分析することにした。本研究では計量テキスト分析のソフトである、KH coderを用いている。KH Coderとは、樋口が開発した、記述的なテキストを客観的、計量的に統計を処理して検討するためのフリーソフトウェアである⁸⁾。彼によれば、KH coderには分析者の理論仮説や問題意識に左右されることなく、データを要約し分析を進められるという利点がある（樋口2014：19）⁹⁾。

ところで、80年代には『マイバースデイ』が人気を集めるなかで、多様な年齢層に向けた「占い／おまじない」雑誌がさまざまに創刊されてきた。実業之日本社は、『マイバースデイ』の姉妹誌としてより専門性の高い『MISTY』（1980年創刊）や、社会人を主な対象とする『MoniQue』（1989年創刊）、小学生向けの『プチ・バースデイ』（1987年）を創刊している。また、学習研究社より『Lemon』（1982年創刊）も発行された。これらの雑誌にも読者投稿欄が設けられてきたが、読者の投書が雑誌の主要な要素として本誌そのものにも影響を与えるに至ったのは『マイバースデイ』だけである。

ひるがえってこのことから、本研究の限界も自ずと明らかになるだろう。本研究は『マイバースデイ』を対象を絞ったため、多様な「占い／おまじない」雑誌のうち一部分を取り上げたにすぎない。

さらに、読者のなかでも投書を行うほどに、熱心な読者についてのみ取り上げるに留まるのである。また、『マイバースデイ』そのものも時代を経るにつれその傾向が変化してきたが、今回は全盛期である80年代に発刊されたものに絞っており、90年代以降の「ハローバースデイ」は対象としていない¹⁰⁾。

ただし、「ハローバースデイ」に見いだされる読者の主体的、能動的な活動は、80年代の、一時的、局所的な現象ではなかったことも指摘しておきたい。2000年代に入って以後、パワースポット、ヒーリング、占いの流行に示される「スピリチュアル・ブーム」が社会から注目されるようになり、今日に至っている。例えば、堀江宗正は、「スピリチュアル・ブーム」に影響を与えた「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原啓之を取り上げ、江原が雑誌、著書、テレビやネットなどのメディアで活躍するようになってから、依頼者と直接的な接触を断ったことに注目する。そして、江原がメディアの媒体それぞれで異なる現われ方をしていることを指摘した上で、メディアを通すことで信奉者はカリスマの直接的な支配から逃れると同時に、選択的消費による責任を課せられることになったことを指摘している（堀江2008）。江原というメディアを通したカリスマと、信奉者との距離のある関係性からは、80年代の『マイバースデイ』の主要記事と、読者投稿欄である「ハローバースデイ」との関係と共通する要素が見いだされるのではないだろうか。

以上の問題関心をふまえ、まず1では80年代の『マイバースデイ』についてこれまで検討してきたことに基づいて概観する。次に2では、80年代の「ハローバースデイ」の内容を概観する。その上で3では、読者による「占い／おまじない」の投書に注目し、計量テキスト分析の結果を踏まえ全体像を俯瞰する。その結果を踏まえて、4以降では投書の内容に踏み込んで検討する。

2. 80年代『マイバースデイ』の概要と特徴

すでに述べたように『マイバースデイ』は、ライフスタイルにまつわる記事も多く掲載してきたが、その主軸はあくまで「占い／おまじない」である。80年代の誌面では、人気の占い師が集中して取り上げられる傾向が見られ、なかでも、西洋占星術を専門とするルネ・ヴァンダール・ワタナベは「占い／おまじない」を、日常生活において人間関係に正面から向き合う努力をし、自己を研鑽するものとして読者に提示した。そのため、彼は「占い／おまじない」を通じて、神秘的な力を身につけ周囲の人びとを幸せにする「白魔女」の理想像を示し、それに向かって努力する読者を「魔女っこ」と名づけたのである。それに対して、マーク・矢崎信治やエミール・シェラザードといった占い師は、ルネの「魔女」像を引き継ぎつつ、学校でも実行しやすい「占い／おまじない」を提示することで人気を集めた。特にマークは読者の立場から執筆者となることで、読者とルネを中心とする占い師とをつなぐ役割を誌面で担ってきたのである。

さらにルネを中心とする占い師たちは、占い師が講演会を行ったり、読者同士が交流することを目的とした「読者の会」に参加するなどして、読者同士を結びつける役割にあることを強調してきた。また、占い師が監修する「おまじないグッズ」のペンダントやキーホルダーといったものが、付録や、通信販売といった形で読者に届けられる仕組みも誌面で整えられてきた。こうしたことから、『マイバースデイ』の主要記事においては、ルネを中心とした占い師が権威者の中心として設定されており、ルネと読者とを結びつける占い師によって権威の強化が図られていたと言える。

だが、「ハローバースデイ」における投書からは、権威者たる占い師の影響を読み取ることが難しく、占い師自身と独立した形で「ハローバースデイ」が展開されてきた。では、読者投稿欄である「ハローバースデイ」では実際にどのような内容がやりとりされていたのだろうか。

3. 「ハローバースデイ」の概要とその内容

「ハローバースデイ」が誌面に掲載されるようになったのは、1979年7月号からである。当初は2ページほどの分量であったが、次第にさまざまな記事が掲載され、ページ数も増えていく。また、定期的の特集として読者の投書を数多く載せる場合もあった。投稿欄は雑誌の中央部に置かれていたが、そのことから誌面で重視されていたことがわかる。投稿者はその内容から、読者層の中心である女子中高生が主であったことが改めて確認されるが、なかには社会人や一時期には男性が投稿する欄も設けられていた。

「ハローバースデイ」の内容は主に大きく誌面が割かれる「おしゃべりロード」の他、「ポエムメッセージ」コーナーや読者から寄せられたイラストを掲載する「MB名画展ふりーばす」というコーナーもあった¹¹⁾。さらに「ハローバースデイ」の特徴として、マーク・矢崎信治による「マークの魔女入門」が連載されていたことが挙げられる。「マークの魔女入門」とは、読者の悩みに対してマークが助言を与えた上で、効果のある「おまじない」の作り方を紹介するというものである。「ハローバースデイ」において占い師が直接に登場することは少ないが、マークの連載記事はそのなかで例外である。この「魔女入門」はたびたび主要記事でも取り上げられ、また、マーク自身が登場し多くの記事を書いていることから、マークが読者と主要記事とを結びつける存在であったと言える。ただし、「おしゃべりロード」といった他の投書と組みあわされることはなく、「ハローバースデイ」の最後に独立して掲載されている。

「おしゃべりロード」では、学校での出来事や恋愛、将来のこと、あるいは悩みごとに関する一般的な内容の記事と、「占い／おまじない」に関連する記事が並列して掲載されてきた。前者の内容としては具体的には、「テストに寝坊して遅刻した」「学校にMBを持って行ったら先生も読ん

ていた」といった日常の事柄を報告するものから、「万引きをしてしまった」「将来に悩んでいる」という悩み事を打ちあける投書までが掲載されている。そのなかでも目に付くのが恋愛に関する内容のものであり、これは後に紹介する「占い／おまじない」の投書にも共通している¹²⁾。

投書を選別し構成する編集部自身が、誌面に直接登場しているのも、この時期の一つの特徴である¹³⁾。例えば、81年4月号から登場した編集部の投稿欄担当者である「ドミ」は、読者の投書に対して感想を述べたり励ましたり、時には叱責したりするなどのコメントを寄せて人気を集めた。さらにこの時期の特徴として、読者が他の読者の悩みにコメントする「感動励ましポスト」というコーナーが設けられ、読者同士の間で濃密なやりとりがなされてきたことも挙げられる。例えば、82年11月号でのコーナーには、9月号に載せられた「友だちが好きな彼を好きになってしまった」という投書に対して、「私も同じ状況になった」といった内容が多数寄せられている。

見てきたように、読者からの投書は、編集部からのコメントが付されたり、さらには他の読者からの応答がなされたりすることで、互いに悩みを打ちあげたり、それを励まし合って解決したりする役割を担っていたことがうかがわれる。こうした形式は、読者による「占い／おまじない」に関する記事にも共通する。では、そうした記事はどのような傾向を持ち、どのような内容のものであったのだろうか。次にこの点について検討を進めていきたい。

4.1 「ハローバースデイ」における「占い／おまじない」投書の内容とその特徴

ここからは、「ハローバースデイ」に読者から投稿された「占い／おまじない」の記事の特徴について、KH Coderによる分析をもとに整理し、その全体像を俯瞰することにする。そのための前段階として、80年1月号から89年12月号までの「ハローバースデイ」に掲載された投書のなか

で、「占い／おまじない」という言葉を直接使用しているものの他に「お守り」「ジンクス」「星座」に言及した記事や、関連する記事を抽出した。その結果、合計で725本の投書が認められた。

これらの投書を、タイトルおよび投稿者のペンネームを含め、読み取りソフトでテキストファイルとしてデータ化し、KH Coderに取り込んだ¹⁴⁾。その上でまず、投書に使用される頻出語（「頻出150語」）を確認し、内容を推測する手がかりとなりうる「おまじない」「マーク」「ルネ」「エミール」「紅」「マドモワゼル」「全ブレ」「座」「MB」「TRAPS」などの名詞および固有名詞を強制抽出の対象として指定した¹⁵⁾。また、異性を示す「彼」も強制抽出の対象としている¹⁶⁾。以上の手順を踏んで得た結果から、上位30位までの頻出語を示したのが表1である。

この表からは、もっとも多く頻出する語句は「彼」であり、「おまじない」は2番目、「占い」は7番目に多い結果となっている。他に特徴的な傾向として、「好き」「大好き」「恋」「片思い」といった恋愛を指す語句が多く見られることも指摘される。さらに、投書を「共起ネットワーク」で分析したのが、次の図1である。

この図1では、頻出度の高い語句が大きな円で表示され、中心となる語がグレースケールで表示されている。また、複数の語句の結びつきの強いものが太い線で結ばれている。「占い／おまじない」の投書に絞ったために、その結果も二つのサブグラフによって構成されていることがわかる。ただし、それぞれの最も大きな要素となっているのは主に異性のことを指す「彼」と、『マイバースデイ』の略語である「MB」である。前者は「おまじない」と結びついており、後者が星座を示す「座」や「占い」と結びついている。他方で、「占い」と「おまじない」は相関しつつも、直接的な関係性が見出せないことから、投稿欄では「占い」と「おまじない」が比較的独立した関係にあることがうかがわれる。

次に、サブグラフの周辺に注目したい。頻出語

ただし、「おまじない」と「占い」をめぐる投書の違いには、誌面での扱ひの大きさも影響していると思われる。「ハローバースデイ」で比較的大きく扱われるのは、「占い」と「ペンダント」についての投書は「おしゃべりロード」のなかで他の投書と同列に扱われ、その内容も比較的長文のものが目立つ。他方で、「おまじない」の記事は本数が圧倒的に多いものの、それぞれの内容が短く紹介されているという違いがある。こうした「ハローバースデイ」の特徴的な構成が、図にも反映されていると見てよいだろう。ただし、こうした違いがなぜ生じたのかは、内容に踏み込んで検討しなければわからない。

以上の分析の結果からは、「占い／おまじない」の投書には共通して、『マイバースデイ』にとって重要な存在であるはずの占い師の影響が見られないことも確認される。頻出語のなかでも、「マーク」が上位から26番目に登場するのみである¹⁸⁾。さらに、「魔女」という、主要な占い師が取り込んできた語句も見いだされない。占い師と投書との位置づけを確認しつつ、次に投書の内容における「占い」と「おまじない」のそれぞれについて、後者では「ペンダント」に関連する記事にも目を向けつつ、整理していくこととする。

4.2 投書における「占い」への言及

「占い」に関する投書では、「当たる」という語句と関連していることから推測されるように、本誌や付録に掲載されている「占い」の結果についての記事が当たったかどうかの主である。ただし、それは単に「当た」ったことではなく、その前後の状況を詳細に報告する傾向が見られる。しかも、主として恋愛をめぐる当たったどうかを取り上げられることが多い。その一例として、80年4月号に掲載された投書が挙げられる。

「友だちでいよう」と突然言い出した彼／ショックです！ だって今月のしし座占い……あたっちゃったんだもの。きのう、彼と

TELでしゃべってたらネ、急に「はっきりいうてええな？ こんなつき合いかたじゃのうて友だちでおろうや。恋とか何とかいう感情が入ったらいつまで続くかわからんじゃろ……。友だちでおったら気軽にしゃべれるし、いつまでも友だちでおれる。じゃけー友だちでおろうや。おれの願いなんよ」こう言われちゃったの。占いに書いてあったから“もしや”とは思っていたけど、やっぱしショック！ でもどうして彼、こんなこと言いだしたのかな？ やっぱ受験のせいかなア……。 (尾道市 猫娘 しし座)

このように、「占い」についての投書のなかには、失恋といった悪い結果が「当た」ったとするものも見られる。また、こうした投書を見ていくと、「占い」は当たったかどうかということよりも、誌面で自身の恋愛での出来事を披露する一つのきっかけとして取り上げられていることがうかがわれる。先の図1で、「聞く」という語句が「MB」を経由して「占い」と関連しているのも、投書の冒頭で「(読者あるいは編集部の) みなさん、聞いてください」という導入部として用いられることが多いからであろう。

だが、すでに述べたように「占い」と関連する投書において占い師が登場することはほとんどない。それに代わって、図1からは、「占い」が「MB」と関連しており、しかも「MB」は「占い」という語よりも多く出現している。これは、読者が「占い」に言及する場合において、その記事を担当した占い師に言及するのではなく、「MB」に載っている「占い」の記事、たとえば毎月の占いの結果を載せた「マンスリー・ホロスコープ」や特集などに言及することが多いからである。

さらに、「占い」の記事を読者はただ受容しているだけではない様子も、投書からうかがわれる。81年7月号に掲載された投書では、「さそり座は『陰気な感じ』と書かれていたのが納得できない」と抗議する投書が掲載されており、9月号にはそ

れに同調する投書が複数掲載されている。その結果、投稿欄には珍しいことに占い師による返答が掲載された。また、読者が創作した「占い」を紹介する投書も少数ながら掲載されており、86年6月からは「私の知ってる占いテスト」という欄も設けられた。ここでの「占い」は、星座などに基づくのではなく、好きな色や食べ物から自分の性格や好きな相手の性格を割り出すという、簡単な内容のものが多い。

以上のことから、「占い」の投書は、読者が日々の出来事を披露したり、自身の性格を主張したりする内容のものが中心をなしている。なかでも、恋愛に関する事柄が多く言及されている。それに対して、「占い」に関する投書からは、それが「占い」の記事を書いた特定の占い師を権威づけるものではないことが確認できる。「占い」が当たらなかったことに対して抗議したり、また、自作の「占い」を披露したりしていることからそれがうかがわれるのである。他方で、すでに述べたように、恋愛については、読者による創作の比重がさらに多い「おまじない」の記事においてより強く見られる。では、「おまじない」の記事はどのような内容だったのだろうか。「おまじないグッズ」の一つである、「ペンダント」にまつわる投書も含めて次に見ていきたい。

4.3 「おまじない」の創作と読者の連帯

図1から理解されるように、「占い／おまじない」の投書のなかで最も多いのが「おまじない」に関するものである。その内容は、「ペン」や「糸」「紙」など身近なものを用いて、「自分」や「彼」の「名前」を記すといった手順を示したものが多く見られる。そしてすでに指摘したように、恋愛に向けられたものが圧倒的に多いという特徴が見いだされる。ただし、それとは別にここでは投書での「おまじない」を特徴づける語句として、「教え」るが挙げられることにも注目しておきたい。こうした特徴を示す典型的な例として、83年10月号に掲載された以下のような記事が挙

げられる。

赤ペン印の彼サマご対面おまじない／とっておきの“大好きな彼ちゃまに会えるおまじない”教えたげる。まずは、みなさんの左手小指ちゃんと赤ペンと彼ちゃまをほどよく愛するあったかいハートをご用意ください。さて、このおまじないは学校で授業中に行うと、とても効果があるので、なるべく午前中の授業をねらってがんばってみてネ。さて、赤ペンをぎっちり握って彼ちゃまのことを思うこと3分間、そしてその赤ペンで、左手の小指に図のようなを書いてほしいのです。もちろん、糸がグルッと指をしぼるように、てのひら側にもきちんと線を書いてね！人に見られたらもう一度やり直し、本当に好きな人とよく会えるんですヨ。(大ちゃん命っ娘)

そして、読者が「教え」た「おまじない」に対して、他の読者が実行した結果について感想を寄せている。その一例として、上記の記事に対する感想を記した84年2月号の次のような投書が挙げられる。

10月号の「彼さま対面おまじない」効果バツゲン！／ちょうど雨の日で、5時間目のときでした。大好きなK君が学校をおやすみしたんです。クラスも違うし、めったなことでは会えないのに、休んじゃったらまる1日会えないでしょ！すっごくさびしかったんです。それで4時間めるとき、このおまじないを思い出して、赤ペンをにぎって「K君さびしいよお～！学校に来て」ってお願ひしたの。そしたら5時間目……なんと私のクラスに遊びに来てるじゃない！びっくりしちゃって、とび上がって喜んじやった。大ちゃん命っ娘さん、どうもありがとう。(MILK)

投書からは、願いが叶ったことに対する感謝だけでなく、手順を間違えたり、残念な結果に終わってしまったりなどする体験談や、それに基づくアドバイスなどが綴られている場合もある。また、なかには自分の願いごとをかなえるための「おまじない」を募集する投書も見られる。読者による「おまじない」のなかでは集中的に人気を集めたものもあり、81年11月号に掲載された、好きな相手と両思いになるために「電話の0番をかける」という「おまじない」を提案した「魔子」の投書がその代表として挙げられる。「魔子」の「おまじない」は投稿欄に掲載されるにとどまらず、本誌で組まれた「おまじない」特集の冒頭に大きく取り上げられた。これをきっかけに「おまじない」は、特集として別冊などに大きく取り上げられるようになる。

ただし、「おまじない」の記事においてもルネやマークといった占い師が登場することがないのは、「占い」の投書と同様である。さらに、彼らが提示してきた「魔女」が読者の提案する「おまじない」に影響を与えた様子もうかがうことはできない。

また、「おまじない」そのものの価値を検討した議論もある。例えば82年5月号には、「おまじない」で好きな相手の心を振り向かせることについて、正しいことなのかどうか悩んでいるという投書が掲載され、編集部が他の読者の意見を求めるコメントを寄せている。それに対して、7月号に『「おまじない」は相手をふり向かせる努力と一緒にすることで、はじめて効果がある』とする他の読者からの応答がなされており、議論へと発展していった。こうした「おまじない」に向けた読者の姿勢からは、彼女たちもまた「おまじない」に頼り切るのではなく、現実の人間関係に向き合う努力に価値を見出していたことがうかがわれる。

ここまで「占い／おまじない」についての投書では、占い師への言及がほとんどなされてこなかったことを指摘してきた。では、占い師はどう

いう役割を担ったのかといえば、彼らは「おまじないグッズ」の監修者という形でかかわっていたのである。こうした「おまじないグッズ」の代表的なものである「ペンダント」をめぐることは、図1に見られるように、その効果に対して「感謝」や「ありがとう」といった謝辞を記したものが多く。ただし、それは監修した占い師に向けたものではなく、「ペンダント」そのものに向けたものであると言えるだろう。さらに、投書を詳細に見ると「占い」の投書と同様に、「ペンダント」を持つに至った前後のエピソードを述べたものが目立つ。また、読者が「ペンダント」の使い方に独自の工夫を重ねて見出した、「ペンダント」の効果をさらに高める方法も紹介されている。こうしたことから、「ペンダント」についての投稿も、占い師の権威を高めるものではなかったことが指摘されるだろう。

では、それらの内容を示す「占い／おまじない」の投書は関連の投書ではどのような位置づけにあり、どのような意味を持つものであったのだろうか。これまで整理してきた「ハローバースデイ」の全体像を踏まえつつ、あらためて検討していきたい。

5. 〈知識〉としての「占い／おまじない」と少女たちの「天蓋」

『マイバースデイ』の主要記事では、「占い／おまじない」は中心となる占い師によって紹介されてきた。それは主に、学校での人間関係に向き合う努力を行い、それによって自己を研鑽することに、価値づけを行うものとして提示されてきた。さらに占い師たちは、「占い／おまじない」に「魔女」のモチーフを取り込むことで、神秘性を強調してきた。

読者投稿欄も『マイバースデイ』においてそれと同等の重要な位置を占めるようになる。「ハローバースデイ」ではマークがコラムを連載していた他に、ポエムやイラストだけでなく、日常の

出来事や悩みについてなど一般的な事柄を綴った投書も多く掲載されていた。また、こうした投書に対し、他の読者が助言や共感を寄せていたことや、読者同士をつなぐ役割として編集部がコメントを寄せていた。そして、これらの投書と並列して「占い／おまじない」の投書も掲載されてきた。

こうした位置にある「占い／おまじない」の投書について、計量テキスト分析ソフトであるKH Coderを使用してその全体像を俯瞰することを試みた。その結果、占い師が不可分なものとして提示してきた「占い」と「おまじない」が、投書では離れた関係にあることが明らかになった。そのなかで、「占い」の投書は主に、雑誌での「占い」が「当た」ったかどうかということではなく、それをきっかけとして日常の出来事に関するエピソードが綴られている場合が多い。他方、「おまじない」の投書は、読者が創作した「おまじない」の材料や手順を「教え」ることが主な内容となっている。さらに、投書を見た他の読者が「おまじない」を実際に実行し、その感想や感謝が掲載されることで、読者同士のつながりが強調されている。また、「占い」と「おまじない」のどちらも恋愛を重視する傾向にあり、特に「おまじない」はそれが顕著であることが分析の結果からうかがわれるのである。

他方で、このような「占い／おまじない」の投書からは、主要記事では権威者として位置づけられている占い師の影響を読み取ることはできない。「占い」については「MB」が言及されるにとどまり、「おまじない」についても占い師が監修した「ペンダント」が取り上げられることで、間接的に言及されるにとどまる。また、占い師に触れた数少ない投書においても、必ずしも好意的に言及されているわけではなく時としては批判されてきた。

ここからは、〈知識〉としての「占い／おまじない」の内容について、検討を進めていきたい。少女たちが投稿欄で示してきた〈知識〉としての「占い／おまじない」は具体的にどのような「制

度」を、どのように「正当化」するものだったのだろうか。

先に見たように「占い」と「おまじない」に関する投書では、恋愛が重視されてきた。その内容からは、読者による「占い／おまじない」では恋愛をひとつの「制度」とみなし、恋愛を「正当化」するに値する〈知識〉として「占い／おまじない」が受けとめられていたと言えるだろう。もっとも、恋愛は一般的な意味において制度と呼べるものではない。だが、バーガーとルックマンの議論に沿うと、少女たちの投書からは恋愛が日常を送るための基盤であり、学校においていくなれば「するもの」として自明視されていた、行為のひとつであったと言えるのではないだろうか。「占い／おまじない」についての投書だけでなく、一般的な内容の投書においても恋愛に関する事柄が多く紹介されていることからそのことが理解される¹⁹⁾。

このように、恋愛を「占い／おまじない」によって「正当化」すべき「制度」に相当するものであったとすると、読者欄における「正当化」の経緯は二つに分けてとらえることができそうである。すでに整理してきたように、「占い」は恋愛に関する事柄を披露するためのきっかけであり、「おまじない」は恋愛の願い事を叶えることを主な目的とするものとなっている。このことから、「占い／おまじない」を恋愛と結び付けその価値を「正当化」する過程を読み取ることができる。さらには、特に「おまじない」において、それが「教え」る「教え」られるというやりとりのなかで、恋愛との結びつきが強化され、共有されていく側面も見いだされるのである。したがって、投稿欄における読者同士の応答そのものも、「占い／おまじない」による「正当化」の過程として挙げるができる²⁰⁾。

このことから、読者欄において少女たちは、〈知識〉としての「占い／おまじない」によって恋愛を「正当化」することで、恋愛と自らを蓋う象徴的世界に基づいた「天蓋」を形成していたと

言えるのではないだろうか。言い換えれば「占い／おまじない」とは、読者が自ら「恋愛する私」の居場所を主体的に形成し、確定するためのものだったのである。

ところで、すでに述べたように、投書には占い師を肯定したり、言及したりすることなく、読者自身の視点からの「占い」の解釈を紹介したり、自ら創作した「おまじない」について報告したりするものが中心をなしている。ただし、占い師と読者との関係は、投書において完全に切断しているわけではない。例えば雑誌に言及したり、監修した「ペンダント」といった「占い／おまじない」グッズに言及したりすることに、間接的ながら占い師からの存在の影響を受容していることが示されている。

だがそれ以上に、占い師と読者は互いに自律した形で「占い／おまじない」をそれぞれの立場から提示してきた。そのため、前者が学校での人間関係全般を重視したのに対し、後者は恋愛に特化してきたという違いがある。ただし、恋愛も学校での人間関係の一つの要素であり、そこから大きく逸脱するものではない。そこから、読者による〈知識〉としての「占い／おまじない」と、占い師によるそれとは互いに自律的な立場を保ちつつも、学校という空間を重視することにおいて相補的な関係を誌面で形成してきたと指摘されるのである。

このことは比喩的に言えば、学校と読者の主体を蓋う「天蓋」を形成していた占い師の「占い／おまじない」の内側に、読者は恋愛と自身を蓋う「天蓋」を形成してきたと言えるのではないだろうか。端的に言い換えれば、占い師と読者による二つの「天蓋」は入れ子の構造になることでより確かな「天蓋」を形成することにつながったのである。これには編集部が大きく影響を与えていることが推測される。しかし、読者と占い師によるいわゆる共同制作としてそこに創出された「占い／おまじない」が、単に編集部によって方向づけられたものではないのも明らかである。

他方で、占い師による「占い／おまじない」と読者によるそれとの間にはわずかながら違いが見られる。すでに述べたように読者による「占い／おまじない」の投書には、「魔女」のモチーフが見られないだけでなく、これといった神秘性を強調する語句も見いだされない。その一方で、ジェンダーを含む学校での「制度」を自明視し、それを「占い／おまじない」の「正当化」の対象として組み込んで行った痕跡が色濃く見られる。このことは逆に言えば、恋愛への関心が薄れてしまえば、本来であれば神秘的、非日常的なものにいたる経路である「占い／おまじない」の魅力そのものが、読者から喪われていく可能性を常に含んでいることを示していると言える。このことが、『マイバースデイ』が90年代を経て、やがて休刊を迎えるに至った遠因であったのではないだろうか。

6. 終わりに

ここまで80年代に発行された『マイバースデイ』の読者投稿欄である「ハローバースデイ」に注目し、そこでの「占い／おまじない」に関する投書がどのようなものであったのかについて、〈知識〉による「制度」の「正当化」の議論に注目しつつ明らかにしてきた。投書において少女たちは、恋愛をひとつの「制度」と見なし、〈知識〉としての「占い／おまじない」によってそれを「正当化」してきたのである。その結果、「恋愛する私」としての居場所を位置づける、いわば「天蓋」に相当するものを生み出してきたと言えるだろう。それは、『マイバースデイ』という雑誌そのものが示す、学校という「制度」と読者の主体を蓋う「天蓋」をさらに補強する位置に置かれてきた。ただし、少女たちによる「占い／おまじない」からは、占い師によるものと対照的に神秘性が後退していることも指摘されるのである。

しかし、「占い／おまじない」を通した神秘的なものへの関心は、社会から消失することはない

かった。冒頭でもふれたように、近年の「スピリチュアル・ブーム」でも、「ハローバースデー」をめぐる動向と同じように、専門家ではない大人の女性たちが「占い／おまじない」に積極的に関わっている様子が見られる。ただし、そこでは「魔女」「魔術」といった非日常的かつ神秘的なものへの強い関心が見いだされるという違いがある²¹⁾。その点をめぐっては、現在では主にネットが彼女たちをつなぐ媒体となっていることにも注意を向ける必要があるだろう。80年代の少女たちとの相違に留意しつつ、女性たちのあいだに広く見られる「占い／おまじない」の動向について、さらに検討することが新たな視点をもたらすことになると考えられるのである。

註

- 1) この場合の〈知識〉とは、バーガーとluckmanによる知識社会学において、「現実が現象的なものであり、それらが特殊な性格をそなえたものである、ということの確証」(Berger and Luckman 1966=1977: 1)として定義されたものを指す。また、「制度」と「正当化」についても、彼らの定義する意味において本研究は使用していく。
- 2) この点について、バーガーとluckmanは宗教としての「天蓋」に言及しているのではなく、あくまで、個人が社会からどのように「天蓋」を生成するのかについて議論を行っているのである。宗教が形成する「聖なる天蓋」のあり様と、近代化にともなう社会での位置づけや、「世俗化」との関わりについて詳しくは、P.L.バーガー『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』(Berger 1967=1979)を参照されたい。また、こうした見方は構築主義にも深く関わってくるが、その点についての議論は別の機会に譲りたい。構築主義については、上野らの議論を参照されたい(上野編2001)。
- 3) 読者数に関しては、「国会図書館インターネット資料保存事業(WARP)」内にある国立国会図書館「第86回常設展示占いあれこれ」と題された展示資料より引用している。(HP http://warp.dandl.go.jp/info:ndl_jp/pid/1151733/rnavi.ndl.go.jp/kaleido/tmp/86.pdf 最終閲覧日2015年10月25日)。
- 4) 島菌は70年代から日本社会に見られる「宗教ブーム」を、新たに形成されたり拡大したりした新(新)宗教と、メディアを通して流行した「呪術=宗教的大衆文化」、その中間にあり、緩やかな世界観を共有しながらも組織を形成していない「新霊性運動・文化」に分けてとらえている。また、「呪術=宗教的大衆文化」を代表する雑誌として、『マイバースデー』といわゆるオカルトの専門誌である『ムー』を挙げている。ただし、「呪術=宗教的大衆文化」と新霊性運動・文化は線引きが明確ではないとしている(島菌2001:172-196)。
- 5) 具体的には1985年の1月と11月に実業之日本社より刊行された『わたしの知っているおまじない』と、『わたしの知っているおまじないパートII』を取り上げている。これは、後述する読者による「おまじない」の投書をまとめた内容のものとなっている。
- 6) また、同じように恋愛を成就するといった願望ではなく、少女たちが独自の世界において遊ぶためのモノとして『マイバースデー』や「おまじないグッズ」を取り上げた森下みさ子による議論も参照されたい(森下1991:125-148)。
- 7) そもそも、少女向けの雑誌に見られる読者投稿欄とは、雑誌に対する感想や身の回りのことを読者が投稿することで、読者同士による特有の価値観や世界観を形成し、共有する役割を担うものであったことがこれまで議論されている(今田2003, 2011)。こうした点を考慮すると、「ハローバースデー」における「占い／おまじない」についての投書と一般的な内容の投書との関係性に注目する必要があると思われる。
- 8) 計量テキスト分析を用いた調査としては、真如苑の信者へのインタビューを検討したものや(秋庭・川端2004)、ウェブ上で公開されている宗教教団の体験談をデータ化し体験談のもつ普遍性を分析したもの(河野2015)が挙げられる。こうし

た分析が、語りや語句の関連から体験談の内容に踏み込むことを目的としているのに対して、本研究は投書から全体像を俯瞰して描き出すことを目的としている。

- 9) KH Coderのソフトはウェブサイトにて公開されている (<http://khc.sourceforge.net/>)。
- 10) 90年代以降の『マイバースデイ』の変化については(橋迫 2015)を参照されたい。
- 11) MBとは『マイバースデイ』の略語である。
- 12) 投書で使用されている文体は、通常の「です・ます」調の他に「～なのヨ」といった当時流行した言い回しが使われている。こうした80年代の「少女の文体」については、少女まんがや少女小説などに注目して整理している大橋(2015)の議論を参照されたい。
- 13) こうした編集部の役割をどの程度に重視し検討するかについては、編集部への聞き取りなど補足的な調査が必要であるだろう。本研究では、誌面において編集部がどのような役割を担っていたのかに限定して取り上げたい。
- 14) 具体的には、国際子ども図書館に所蔵されている『マイバースデイ』のうち、「ハローバースデイ」をコピーしたものをスキャナーでパソコンに取り込んだ上で、読み取りソフトで変換してテキストファイルにした。
- 15) 主力の占い師であるマーク・矢崎信治、ルネ・ヴァンダール・ワタナベ、エミール・セラザード、紅亜里、マドモワゼル・愛を抽出するためのキーワードである。「全プレ」は応募者が全員受け取れる「全員プレゼント」、「MB」は『マイバースデイ』の略語である。「座」は、十二星座のそれぞれを抽出するために設定した。なお、類出語の上位に入り、共起ネットワークにも出現するものの、解釈できない記号である「一」と、意味が多様なため解釈が難しい「人」「子」「今」「前」は「使用しない語」として指定し、処理した。
- 16) 「彼」は一般的な語句であるが、投書では「彼サマ」「彼ちゃま」といったように好きな相手についての独自の言い回しとして表記される場合が多い。
- 17) この点を確認するために、コーディングファイルを設定して分析を行った。その結果、「恋愛」498本(68.69%)、「学校・テスト」213本(29.38%)、「友だち」155本(21.38%)、「美容・健康」22本(3.03%)、「お金」18本(2.48%)、「その他」102本(17.38%)となった。ただし、「友だち」については他のカテゴリーである「恋愛」「学校」にも含まれるため、正確な区分けをすることができず、この分析はあくまで全体の傾向を示す目安であるにすぎない。なお、コーディングルールのコードについては省略する。
- 18) また、占い師の固有名詞からコーディングルールを作成し、単純集計したところ、投書のうち70本(9.66%)に出現するに留まることを確認した。
- 19) 木村涼子は学校におけるジェンダーと文化について、日米の少女小説を手がかりに検討している。木村によれば、女の子にとって異性との恋愛は、世界観や自己像を規定し、「精神世界を広げていく」(1999:155)ものであったという。恋愛に関心を持つ少女たちは、学校教育の文脈から言えば学業からの逃避であると言えるだろう。しかし、日本の少女小説が異性とのロマンスにおける人間関係の形成を通じた、「精神成長」を重視しており、少女たちはそれを能動的に読むことで「精神修養」の空間を思春期に生み出したと木村は指摘している(木村 1999:203)。このことから、恋愛は少女たちにとって、学校での恋愛が潜在的な「制度」であったことが推測されるのではないだろうか。
- 20) 「教え」られる側だけでなく、「教え」る側にまわることによって「気づき」を得て、さらなる教化に結びつくという視点は、新宗教教団に見られる関係性でもある。詳しくは真如苑の強化委員に焦点を当てた芳賀と菊池による議論を参照されたい(芳賀・菊池 2006)。ただし、真如苑では「上から」の教えを共有する範疇にあるのに対して、『マイバースデイ』は読者が自律して「教え」る、「教え」られるという関係を形成してきたという違いがある。
- 21) こうした現在のサブカルチャーに見られる「魔女」や「魔術」については、詳しくは堀江による議論

を参照されたい(堀江2015)。

文献

- 秋庭裕・川端亮, 2004, 『霊能のリアリティへ——社会学、真如苑に入る』新曜社。
- Peter Berger and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York, Doubleday & Company Inc. (=1977, 山口節郎訳, 『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社。)
- Peter Berger., 1967, *The Sacred Canopy Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York: Doubleday & Company Inc. (=1979, 藺田稔訳, 『聖なる天蓋』新曜社。)
- 芳賀学・菊池裕生, 2006, 「仏のまなざし、読みかえられる自己——回心のミクロ社会学」ハーベスト社。
- 橋迫瑞穂, 2014a, 「『おまじないグッズ』における『手づくり』と少女——雑誌『マイバースデイ』の事例から」『年報社会学論集』27: 146-57。
- , 2014b, 「『占い・おまじない』と少女——雑誌『マイバースデイ』の分析から」『宗教研究』381: 77-99。
- , 2015, 「脱『魔女』化する『占い・おまじない』——90年代『マイバースデイ』を中心として」ソシオロゴス編集委員会編『ソシオロゴス』39: 116-132。
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
- 堀江宗正, 2008, 「メディアのなかのカリスマ——江原啓之とメディア環境」国際宗教研究所編『現代宗教』秋山書店, 41-64。
- , 2015, 「サブカルチャーの魔術師たち——宗
- 教学的知識の消費と共有」江川純一・久保田浩編『呪術の呪縛 上巻』リトン, 417-466。
- 今田絵里香, 2003, 「少年雑誌におけるセンチメンタリズムの排除——1930年代の『日本少年』『少女の友』投稿欄の比較から」日本女性学会学会誌編集委員会編『女性学』11: 86-106。
- , 2011, 「戦後日本の『少女の友』『女学生の友』における異性愛文化の導入とその論理——小説と読者通信欄の分析」大阪国際児童文学館編『国際児童文学館紀要』24: 1-14。
- 河野昌広, 2015, 「インターネット上の宗教体験談——宗教言説データベースの構築とその利用による計量的分析」早稲田大学社会学会編『社会学年誌』56: 77-92。
- 木村涼子, 1999, 『学校文化とジェンダー』勁草書房。
- 森下みさ子, 1991, 「占い・おまじないと『わたし』の物語——『マイバースデイ』をめぐる」大塚英志編『少女雑誌論』東京書籍株式会社, 125-148。
- 大橋崇行, 2015, 「少女の文体——新井素子初期作品における一人称」大橋崇行・山中智省編『ライトノベル・フロントライン』1: 116-136。
- 大塚英志, 1995, 「補論ファンシーグッズの少女民俗学——おまじないと〈モノ〉の位相」『りほん』のふろくと乙女ちっくの時代——たそがれ時にみつけたもの』筑摩書房, 187-212。
- 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教——現代日本の精神状況の底流』東京堂出版。
- 上野千鶴子編, 2001, 「構築主義とは何か」勁草書房。
- 弓山達也, 1996, 「青年層における宗教情報の伝達について」池上良正・中牧弘允編『情報時代は宗教を変えるか——伝統宗教からオウム真理教まで』弘文堂, 25-45。